慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Joshua M. Roose, Political Islam and masculinity : Muslim men in Australia
Sub Title	
Author	関根, 政美(Sekine, Masami)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2018
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.91, No.10 (2018. 10) ,p.141- 152
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20181028-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Joshua M. Roose,
Political Islam and Masculinity: Muslim Men in Australia

はじめに

今回の「紹介と批評」で取りあげる本書は、ムスリム系若者オーストラリア人の社会適応の実態の一端を明らかにしようとする。多文化社会オーストラリアに居住するムスリム系移民住民の生活実態はよく知られていないにもかかわらず、近年の欧米社会に共通する「イスラム恐怖症(Islamophobia)」に侵されたオーストラリアでも、ムスリム系住民、とくに若者（小さい時に親と一緒に移住した若者やオーストラリアで生まれた第二世代の双方含む一五〜二五歳の人々）は、社会の安寧を脅かす過激主義者であるとステレオタイプ化されている。しかし、インタビュー調査をもとに子細にみると、ムスリム系若者の多くはムスリム系オーストラリア人として普通の生活を送っているだけでなく、オーストラリア社会においてエンターテイナーとして、あるいは高度専門職種従事者として成功している者もいる。ムスリム系オーストラリア人の生活はテロリストに代表されるいびつなものではないということを明らかにするとともに、「社会的上昇適応（upward social trajectory）」に成功するムスリムと「社会的下降適応(downward social trajectory)」により社会の底辺で周辺化してしまうムスリム系若者を生みだす諸要因を検討し、下降適応するだけでなく、過激な「イスラム思想（Salafi jihadist narrative)」を受容し、テロリストになる人びとを巡る様々な要因を検討し、今後の対応策を考えようとするものである。

著者の Joshua M. Roose 氏は、オーストラリア・カソリック大学「宗教・政治・社会研究所」研究員であると同時に、ハーバード大学法学部東アジア法律研究プログラム訪問学者として活動し、欧米のムスリム系住民やイスラム法、多文化主義と社会について数多くの論文を刊行している。

紹　介

目次は以下の通りである。

Preface: Muslim Masculinities（xi）
Acknowledgements（xv）
Introduction: The Question of Muslim Masculinities（1）
1. Political Islam and Masculinity: A New Approach（7）
2. Muslims in Australia（33）
3. The Brothahood: “Australia’s Mine Too”（51）
4. Waleed Aly: “To Live in the Realm of Ideas”（87）
5. The Benbrika Jama’ah: “The Reward of the Mujahid”（117）
6. 9/11’s Children: “Chasing Martyrdom”（155）
7. The Centrality of Hope, Belief, and Upward Social Trajectory（189）
Notes
Bibliography
Index

本書の概要

序章では、本書で著者が明らかにしたいことの概略を紹介する。第一の目的は著者がオーストラリアのムスリム系若者に焦点を当てて調査をしてみると、オーストラリア社会に適応して社会的に上昇しイスラム・コミュニティのリーダー的存在になると同時に、オーストラリア主流社会に参入し、高度職種従事者として働き、白人の多い裕福な郊外で安定的な生活を営むだけではなく、白人を中心とした非ムスリム系国民に交じり、堂々とオーストラリア社会に住むムスリム系住民に対する差別や偏見が存在することを明らかにすると同時に強く批判し、ムスリム系住民と非ムスリム系住民との間の相互理解と多文化共生を促すミドルマンとしての役割と同時に、ムスリム系住民の政治運動をリベラル民主主義の原則に従って指導し、主流社会のリーダーたちからも信頼を勝ち取るような人々も登場しており、現在のオーストラリア連邦政府や一般の人々が思い描いている、ムスリム系若者は過激なテロリストだという否定的なイメージが誤りであることを明らかにすることである。

第二の目的は、社会適応に成功し社会的上昇を果たすムスリム系若者もいるが、イスラム恐怖症の元凶となるような、学校適応（教育）・社会適応（就職）に失敗し下降的社会移動を経験し、オーストラリア主流社会への安定的参入に失敗するだけでなく、家族（両親）が属すイスラム・

コミュニティからも疎外されて、あるいは自ら離脱して行き場を失い、非行グループに所属して犯罪者となるものや、居場所探しをしているうちに、いつの間にか過激なイスラム思想を唱えるイマムのいるモスクやイスラム信徒集団に所属しているところを、ＩＳのエイジェントに誘われてホームグロウン・テロリストになるものや、ＩＳ兵士として中東地域に渡航するものも生まれていることも確かである。このタイプの人々は、先の成功者と出身階層に大きな違いはないが不安定な家庭環境やイスラム・コミュニティとの関わり方に問題があり、結果的にはイスラム・コミュニティを通して与えられるオーストラリア多文化主義に基づく連邦と州政府からの生活・教育・就職訓練・医療・福祉面での各種の支援を受けることができないケースが多い。

こうした社会的下降移動の発端は、中学・高校レベルでの学校不適応によるものが多い。その原因は本人の学力の問題というよりは、イスラム恐怖症を身につけた同級生による差別的で偏見に満ちた言動（日本では「いじめ」と表現されるものは、オーストラリアでは人種差別となるケースが多い）により精神的に傷ついたことが原因であったりする。さらに問題はイスラム恐怖症にとりつかれた学校の教師の心無い言動が原因であったりする。こうした場合、家族が子供の教育に熱心で経済力がある場合、裕福な人々の住む郊外の私立学校へ転校したりして問題を回避できる。また、イスラム・コミュニティとの関係を密にしてコミュニティの福祉活動や教育支援活動を頼り、問題を切り抜けることも可能だが、子供の教育に熱心ではない家庭の場合、あるいは熱心ではないイスラム教徒の両親の場合、さらに母親あるいは父親を失った家族の子供の場合、子供が直面する困難・悩みが放置されてしまう場合が多い。

厄介なことは、ムスリム系若者の場合、伝統的なムスリム男性の「誇り高き男らしさ（masculinity pride）」に対するこだわりが強いことである。男らしさは、教育を受け就職して社会人として自立し、家庭をもち家族を養い家父長としての権威を獲得・維持し、社会的にも政治的にもイスラム・コミュニティや主流社会に参加していくことを通じて満たされることが多い。そのことにより、社会統合的な「正統的アイデンティティ（legitimizing identities）」を維持し尊敬を勝ち取り安定的パーソナリティを獲得する。それに対して教育で失敗し社会的下降を経験したものには男らしさを実現し、周りから認められる機会は制限されやすい。ときには、精神的に不安定になるだけでなく、男らしさへの欲求を満たせないことに対する不満を、徐々にホ

スト国家・社会への憎悪・恨みに変換して、「抵抗的アイデンティティ（Resistance identities）」を発達させ、国家や警察、あるいは諜報組織への攻撃を考え、実行することで男らしさへの欲求を充足しようとするのである。本書の序章では以上のことを明らかにした後に、本書の各章について概略を紹介する。以下各章の概略を紹介する。

第一章では本書で使用する諸概念（アイデンティティ、権力、男らしさ、政治的イスラム）について概略を紹介した後、従来の研究は、学校・社会不適応でオーストラリア社会に対して抵抗的で反抗的なアイデンティティを発達させるムスリム系若者とその政治行動に焦点を当てるものが多かった。しかし、本研究は、似たような家族背景・社会・経済的背景をもつにもかかわらず、一方で学校・社会適応に成功し、オーストラリア社会において民主主義社会にふさわしい健全な政治活動を行うムスリム系若者が生まれるのに対して、他方では失敗して反社会的な政治活動を行うムスリム系若者の双方に注目し適応と不適応の原因を探るということを改めて明らかにする。従来の研究では不適応は経済的に不利な環境が原因であることが強調され、貧困にあえぐムスリム系若者は皆過激なムスリムになるという現代社会に蔓延する偏見を助長しかねないので、本書では双方の若者の出身背景が似ている点が強調される。

結局、成功したムスリム系若者は、P・ブルデュー（P. Bourdieu）の議論に沿った「経済資本（economic capital）」、「文化資本（cultural capital）」、「社会資本（social capital）」、「象徴資本（symbolic capital）」などの面において恵まれており、社会的上昇が可能だったということになり、恵まれていないものは下降移動を経験するしかないということになるのだが、学校適応や社会適応に必要な様々な資源と、適応・不適応によってムスリム系若者が発達させるパーソナリティやアイデンティティについては、M・カステルズ（M. Castells）の議論を採用していることと、男らしさの概念についてはオーストラリア人研究者のR・W・コンネル（R.W. Connell）の議論に従っていることを明らかにする。

第二章は、オーストラリアにおけるムスリム系移民の歴史と現在のムスリム系住民の人口構成や経済・社会的特徴についてまず概観する。ムスリム系移民の歴史には、英国系移民（流刑囚）が一七八八年にオーストラリア大陸東南部に入植する以前より、インドネシア諸島からムスリム系ナマコ漁民が大陸北部に定期的に訪問し、北部の先住民との接触を保っていたことや、一九世紀後半以降に大陸中

央・北部のオーストラリア人入植者が運輸・交通手段としてラクダを輸入して利用したが、そのラクダの管理と御者を務めたのがアフガニスタンから移住したムスリム系移民であったとか、レバノンからの行商人ディアスポラも移住していたという歴史があるが、今日のムスリム系住民のほとんどは、第二次世界大戦後、白豪主義が終了した一九七〇年代後半より移住した移民や難民である。二〇一一年のオーストラリアには、四七万六二九二人（総人口の二・二％）のムスリム系住民が在住している（総人口は二〇一一年当時、二二五〇万人）。シドニーには全ムスリム人口の四四％に当たる二〇万八一四九人が住むのに対して、メルボルンには三〇％に当たる一四万三六三九人が住んでいる（メルボルン人口の三・七五％）。ムスリム系住民の教育レベルは非ムスリム人口の平均よりむしろ高いが、失業率は非ムスリム系住民平均よりは高く、専門職等高度人材職種への就職率は非ムスリム系住民平均より低く、世帯収入も低い。さらに、低所得郊外地域に集住している傾向が強いことが明らかにされる。

また、本章ではムスリム系住民に対するオーストラリア連邦政府とビクトリア州政府の対応の変化が扱われる（研究対象のムスリム系若者はビクトリア州郊外在住者）。一九九〇年代までは、連邦・州政府とも社会統合政策としては多文化主義を積極的に採用し、多様性のなかの統合を模索していたが、オーストラリア人も多く被害に遭った二〇〇一年のニューヨーク・ハイジャック連続テロと翌年のインドネシア・バリ島自動車爆弾テロ事件、二〇〇五年のロンドン連続テロ事件以後（犯人の一人がオーストラリアに定住していたことが判明）、多文化主義への批判が強まり、ハワード連邦自由党・国民党保守連合政府はムスリム系ボートピープルの大陸北部への侵入阻止活動を強化すると同時に、移民の帰化条件として「シティズンシップ・テスト」を導入し合格を必須とすると同時に、社会的結束を強化するためにリベラル・ナショナリズムを強化するようになった（多様性よりはオーストラリアのリベラルな価値の強調）。それに対して、ビクトリア州政府は連邦政府の動きとは異なり、レバノン人を祖先の一人にもつブラック首相率いる州労働党政府は多文化主義・多宗教主義を堅持していた。しかし、ムスリム系住民に対する非ムスリム系住民の不信感は強まると同時に、ムスリム系若者のテロ未遂事件が警察により摘発される回数が増えると不安が高まり、州警察や連邦諜報機関（ＡＳＩＯ）などによるムスリム系若者に対する監視行為が強化されていくようになり、イス

ラム・コミュニティへの監視も強化されていった。要するに、ムスリム系住民への厳しい社会環境が強化されていったことが明らかにされる。

第三章では、前章で明らかにされたように、ムスリム系住民への敵対的社会環境が強化されムスリム系住民にはストレスの高い社会になっていくなかでも成功した、ムスリム系若者によるヒップポップ音楽グループ「ブラザーフッド（The Brothahood）」である。五人の若者男性によるグループだが、五人ともオーストラリア生まれの第二世代である。出自（両親の出身地）はそれぞれ異なりレバノン、ビルマ、トルコ、エジプトと分れている。一九九〇年代後半にオーストラリアで結成され、現在では、インドネシアをはじめ東南アジア諸国のムスリム系若者の間にもファンが増大し国際的に活躍している。彼らは、音楽によりムスリム系若者を含むムスリム一般に対するオーストラリアや世界各地の人々がもつ偏見・差別・誤解を批判するとともに、過激なムスリム若者のテロ活動や過激思想はムスリム一般の姿とはかけ離れていることを訴え、正しいムスリム理解を求める中庸な政治活動も意図しており、そのような目的に沿った内容をもつ音楽も発表している。

本章では、このグループのメンバーが、メルボルン北部の郊外で育った若者であり、ムスリムとしては中産階級家族を背景としており、学校にもうまく適応し（メンバーのなかには大学入学資格を得たものもいる）社会にも適応しているだけでなく、仕事をしながらイスラム・コミュニティの教育を含む若者の生活支援組織である「オーストラリア・ムスリム青年組織（Young Muslim of Australia: YMA）」の諸活動に参加しており、ＹＭＡの活動のなかで五人が出会いグループを結成したという経緯がある。また、五人へのインタビューのなかで、五人はムスリムとして穏健なイスラムの教えをしっかり学んでいることが確かめられると同時に、学校生活や仕事を通して非ムスリムの人々と交わり西洋文化に対する基本的知識を身につけていることも明らかになる。しかし、オーストラリアでの学校生活や職場においてもムスリムに対する偏見・差別を経験し、それが音楽活動を通しての政治活動に繋がっていることも明らかになる。基本的に、生活の過程で挫折しそうなときにイスラム・コミュニティの支援を頼ることができ、結果的には、順調な生活がこのグループの背景にあることが分かる。最後に、彼らは「オーストラリアはわれわれの故郷でもある（“Australia’s Mine Too”）」と語っていることを

示す。

第四章では、メルボルン北部の裕福な郊外で育ち、メルボルン大学に進学したワリィード・アリ（Waleed Aly）が紹介される。大学卒業後オーストラリアの若者と同様にしばらくはいくつかの職業を経験した後、法律事務所で働きながら、新聞・テレビでの反ムスリム的な発言に対する批判意見を新聞やラジオに投稿しているうちに、テレビ出演を依頼されてから注目を集めたこともあり、大学講師としてモナーシュ大学に所属し研究と教育に携わりながら、イスラム・コミュニティのオピニオン・リーダー的存在となった。テレビ・新聞のコメンテーターとして非ムスリム系オーストラリア知識人・評論家などと堂々と議論し、ムスリム系オーストラリア人として尊敬を勝ち取る人物に成長した。著者による調査では、エジプト出身の両親のもとにメルボルンで生まれ、ムスリムとしては裕福な家庭に育った。両親は共稼ぎであり父親は科学技術者であり、母親は中学教師で子供の教育と成功に力を入れて、わざわざ教育環境のよい白人の多い郊外に引っ越ししていたことが判明するだけでなく、熱心にイスラム・コミュニティの活動にも両親が参加していることから、息子のアリもイスラム教に興味を持ちＹＭＡの活動にも熱心で、同年代の若者へのイスラム教指導者として活動をしている。その後、メルボルン大学でもイスラム教団体で活動した後に「ビクトリア・イスラム評議会（Islamic Council of Victoria: ICV）」でも指導的な地位についている。基本的には中庸で穏健なイスラム教徒であり、後に論じるようなテロ活動に参加するムスリム系若者の活動や若者に影響を与える過激思想には批判的である。と同時に過激グループから強い批判も受けている。前章で見た通り、アリは西洋思想・文化にも精通できるような環境で育ち、非ムスリム系オーストラリア人の尊敬と信頼を得ている。

第五章と第六章では、社会的に周辺化され、過激なムスリム・テロリストやイスラム戦士になった若者のケーススタディが紹介される。第五章では、二〇〇〇年代半ばにオーストラリアで連邦反テロリスト活動法の最初の適応を受けて処罰され注目を浴びた「ベンブリカ・イスラム信徒集団（Benbrika jama'ah）」の指導者とそのメンバーを中心に扱う。ベンブリカ・イスラム教団は、四六歳の教団指導者アブドゥル・ナサール・ベンブリカが指導する過激イスラム教団で、ベンブリカのもとに集まったムスリム系若者（平均年齢は二四歳）を指示してテロ計画を準備しているところを、警察に密告されて二〇〇五年に逮捕され、二

〇〇八年に裁判にかけられ処罰された。本章と次章では事件の捜査記録や電話盗聴テープ、警察による取り調べ調書、裁判記録などをもとに参加者の生活や行動と思想を再構成している。これは、拘束された個々の人物にインタビュー調査が許可されなかったことから採られた手段である。ベンブリカ・イスラム信徒集団は第四章で扱われたワリィード・アリが所属するＩＣＶ傘下にある穏健なイスラム教義に基づく公認された教団・信徒集団ではなく、潜りに近いものであり、その存在すら事件発覚まで公には認知されていなかった。若い時にアルジェリアから短期滞在ビザを取得して移住し、その後オーストラリアに不法滞在者として定住していたベンブリカは、オーストラリア国籍をもつムスリム女性と結婚して特別滞在許可を得てそのままオーストラリアに滞在していたが、オーストラリア政府の福祉への依存生活を脱するため、生活費を稼ぐ手段として自分を指導者とした小さな信徒集団を組織し、集団のメンバーには社会的に周辺化されたムスリム系若者を勧誘していた。

ベンブリカ事件で逮捕された若者は全部で一五名だったが、このなかの一人はアングロ系オーストラリア人の一九歳でイスラム教に改宗した人物である。これらの若者は、概ね以下のような特徴を有していた。その多くはムスリム系住民の多いメルボルン北部の郊外で生まれ育っていた。多くは学校には適応していたが、偏見・差別に晒された経験をもっていた。なかには大学に進学している者もいたが、にもかかわらずよい就職口には恵まれず、よい職業についたものも解雇されやすく、不安定職種を転々としており、次第に社会的下降移動を経験し周辺化され、イスラム・コミュニティや主流社会から疎外されたものが多い。居場所を失い、孤独な状態にあったので居場所探しをしているうちに犯罪・非行集団に帰属して犯罪者になった経験をもつものもいた。ベンブリカはそのようなムスリム系若者を巧みに勧誘して信者にしていた。ベンブリカは、若者に過激なイスラムジハード思想を教えていたのである。ベンブリカは長いオーストラリアでの不遇生活からオーストラリア政府・社会全般に対する恨み・不満を次第に強めていたが、一方で男らしさを満たす機会を求めていた。

オーストラリア政府が米国ブッシュ政権に追随してアフガニスタンやイラクにオーストラリア軍特殊部隊を派遣すると、攻撃され苦しんでいるムスリム同胞を救うために、オーストラリア連邦警察、軍隊、諜報機関などの秩序維持諸機関への攻撃を聖戦として正当化し実行しようと考えはじめ、二〇〇五年に実際に実行しようとしたのである。信

徒となっていたムスリム系若者たちも、男らしさの欲求を満たしていなかったことから、ベンブリカの誘いに乗ったのである。オーストラリア政府諸機関へのテロ攻撃による同胞支援は「男らしい」行為であるとしてベンブリカの指導に従ったのである。

しかし、ベンブリカとその仲間たちのテロ計画は稚拙なものであり、たちまちのうちに密告されてしまった。学校・社会適応に成功したムスリム系若者の政治行動は、民主主義に則ったものだったが、周辺化され、社会的に統合されていない若者の政治行動は反社会的なものであった。彼らは反抗的で反社会的なアイデンティティを育てていた。個々人の学校および社会不適応の切っ掛けは多様である。非ムスリム系オーストラリア人同級生や同僚の偏見・差別のみに起因するものではなく、家族内の不幸や反抗期若者に特有の親子喧嘩なども多い。家族や親族の勉学やイスラム教習得への期待も小さく、親からの期待が低く挫折を経験したものも多い。両親がイスラム・コミュニティと関係を密にしていないことが多く、得られる支援も少なく、社会不適応も多い。非ムスリム・オーストラリア人との接触の機会も限られ西洋文化を身につける機会も少なく、主流社会と乖離する傾向が強く、オーストラリア政府攻撃にも逡巡することはなかった。

第六章で扱われる反抗的ムスリム若者の生活の軌跡は、第五章のベンブリカ・イスラム教団事件関係者と類似しているが、本章で扱われた若者は先の若者に比べ一〇歳ほど若い一〇代の少年たちであり、学校不適応で社会的周辺化を経験しているときに、過激思想のモスクやイスラム教団と接触し、その際にＩＳのエイジェントに誘われたり、ネット上でのＩＳとの接触により、国内テロを実施したり、イラクやシリアに渡航してＩＳ兵士となり、テロ攻撃に加わり死んだ者もいる。本章ではそのような経験をした三名の若者が扱われる。三名のうち一人はアングロ系オーストラリア人でイスラム教に改宗したものである。ベンブリカ・イスラム教団のアングロ系オーストラリア人改宗者同様、有名私立学校に適応しつつも、何らかのきっかけでオーストラリア社会に絶望し、希望を失い、親に相談することもなく新たな生活の意味を求めてイスラム教に改宗し、イラクやアフガニスタンで欧米多国籍軍の攻撃を受けているイスラム同胞を支援したいと考えるようになった。学校での先生や級友からいじめや、家族の不幸などがきっかけで改宗し、男らしさを実現するためにテロやＩＳへの参加を決めたようだが、いずれにせよ抵抗的で反抗的なアイデ

ンティティを保持するようになったのである。本章では、このような若者は米国での九・一一事件の際に四、五歳の幼児であり、物心がついてからはムスリム同胞が常に欧米の攻撃や批判にされている姿しか知らず、ある意味で容易にムスリム同胞への同情と支援を受け入れやすい精神状況にあった「九・一一事件児童（the “children of 9/11”）」であったことが強調される。

第七章は、本研究のまとめと結論である。著者が結論のなかで強調したいことは、ムスリム中産階級出身者で学校および社会不適応状況に陥り、社会的下降移動のあげくに周辺化されて居場所を求めているうちに過激なイスラム思想に影響されて抵抗的アイデンティティを発達させていくムスリム系若者の調査から、はっきりいえることは、こうした若者の多くが、オーストラリア社会に対して大きな絶望感や失望感を抱くだけではなく、ムスリム系若者というだけで、警察官や諜報機関員に付きまとわれたり、職務質問を受けたりして常に監視されているという不安から屈辱感を感じていたこともあり、未来への希望を失い、なかには精神病に侵されてしまっている場合もあるということである。こうした若者には救いの手が差し伸べられなくてはならないが、連邦・州政府は、ムスリム系若者を危険視しているだけで、救いの手を差し伸べるということには考えも至らない状況にあり、事態は悪い方向に向かっているのである。

さらに悪いことに、著者の調査から浮かび上がった事実は、オーストラリアの多文化主義政策は確かに周到なものではあるが、社会的に周辺化され疎外されているムスリム系若者には多文化主義の恩恵は届きにくいということである。多文化主義に基づく支援は、イスラム・コミュニティの各種ＮＧＯ・ＮＰＯやボランタリー組織や福祉機関、あるいは地方自治体を経由して与えられるようになっているが、周辺化されたムスリム系若者にとって、こうした組織は最も近寄りがたいものであり、むしろ反抗的・敵対的な感情さえ抱いている場合が多いのである。また、こうした支援組織や自治体組織にはムスリム系若者を警戒している傾向があり、そのために若者だけでなく誰もがもつ「承認欲求（recognition needs）」や「帰属意識（a sense of belonging）」が満たされないため、ますます互いに疎遠となる傾向が強いのである。こうした悪循環を断ち切るための努力があまりみられないというのが現状である。オーストラリアでは多文化主義の成功物語が政府関係者によりしばしば語られるが、本調査からは実際にそうだとはいい難

いと結論せざるを得ない。多文化主義の本当の成功には周辺化されているムスリム系若者への支援が届かなければならないのであり、今後はそのために何が必要かさらに調査する必要があると指摘して論が閉じられる。

批　評

本書が明らかにした多文化主義社会オーストラリアに住むムスリム系若者の生活実態は、学校・社会適応者と学校・社会不適応者の双方に分かれているものを同時に立体的に描いていることから、単に、出身社会・経済階層によってその生活が決まっていくとか、イスラム原理主義教徒だから過激になるのだというのではなく、様々な条件が入り組んでムスリム系若者の人生が決められ、イスラム恐怖症に基づくステレオタイプによるムスリム系若者理解が大いなる誤りであることが明らかになるだけでなく、むしろ非ムスリム系国民側のイスラム恐怖症と敵視が若者を過激なイスラムに接近させる条件を生みだすことが、問題だと示唆されている点は重要である。

評者にとり重要だと思えたのは、確かに、社会的に成功している若者は多文化主義支援を受けており、多文化主義社会オーストラリアの面目躍如たる側面を見て取ることができる。だが、多文化主義に基づく各種の支援サービスが、一番必要な社会的下降移動や、社会的周辺化の危険に晒されているムスリム系若者には届かない、あるいは届きにくいという点である。多文化主義支援はイスラム・コミュニティの各種支援組織を通して供給されるものと、行政機関より供給されるものがあり、イスラム・コミュニティと主流社会から乖離している若者には届きにくい、あるいは近づきがたいのである。著者のいう通り社会的下降により周辺化されているムスリム系若者に対して多文化支援サービスが届いていないという点を無視して多文化主義の成功をいうことはできない。今後、ただ危険視して監視強化するだけでは問題はさらに大きくなるだけである。本書の結論では、この点が改めて強調され、今後解決策を探るための調査の継続と拡大が求められているが、まさにその通りであるとともに、より政府自らが積極的に調査するという姿勢が必要ではないかと思われる。

二〇一七年八月一八日にスペインのバルセロナとその周辺でモロッコ系ムスリム系若者グループによる連続テロが起き、バルセロナの中心街では人通りの多い道路・歩道にバンが突っ込みそして暴走し、一三名が死に一〇〇人以上が負傷したという事件があった。バンには五人の仲間が乗

り込んでいたが、その一人が年齢的には彼らの宗教指導者であったらしいとのニュースを聞いて、本書第五、六章の記述が蘇ってきた。被害者のなかにはオーストラリア人観光客もおり、母子親子も含まれ、母親は重傷で入院し、その七歳の息子は一時行方不明だったが、死者のなかにいたことが数日して判明した。一七年はじめにオーストラリアのメルボルンでも似たような事件が起きており、今後もムスリム系若者への見方は厳しいままであることが予想されるが、本書の議論を忘れずに、社会的結束・監視強化以外の方策を考えていくことも忘れてはいけないだろう。

ただ最後に一言。少々惜しいと思ったことは、本書にて低所得家族を背景にもつ若者で社会的に適応し、成功した事例が紹介されていると、本書はより万全なものになったのではないかという点である。

(New York: Palgrave Macmillan, 2016（271pages including Index））

関根　政美